

寺子屋ガイド

※題字／森川芳聲

もくじ

- 2 巻頭言『巻頭言を読み返す』……山口 秀範
- 3 教育雑感⑥……………白濱 裕
- 4 偉人レポート……………高見澤 玉江
- 6 橋を架ける②……………占部 賢志
- 8 広辞苑と父(連載二回)……………水崎 之子
- 9 やっぱり神様が好き(第二回)……元木 哲三
- 10 TERA KOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 碑のこころ(6) 編集余録



碑のこころ

高瀬川辺の遭難碑

京都市中京区

※詳しい解説は1頁に掲載しております



卷頭言を読み返す

代表世話役

山口 秀範

承前 「寺子屋だより」創刊から八年半で第五〇号の発行に到りました。その間で最大の出来事は、言うまでもなく東日本大震災でした。

「国家的危機からの再起を」(三十六号・平成二十三年四月) 三月十一日の午後、新幹線で名古屋に向かう途中、広島を過ぎたところで地震発生を告げる車内放送に接し、列車は新大阪までで運行取り止めとなりました。一泊を余儀なくされた大阪市内のホテルに入り、部屋のテレビをつけてしばし呆然、太平洋沿岸の各地を襲う津波の猛威に息を呑むばかりでした。

未曾有の大災害の中で被災者の振舞いは実に自制が効いて、他者を思い遣る心やさえ湛えています。また決死の覚悟で人命救助や放射能飛散阻止に当る人々の士気は極めて高いと伝えられます。亡くなった方で職務を優先して或いは弱者を助けて津波に吞まれた勇者も多いことでしょう。私たちは徒に落胆・悲観するのみでなく「平成の偉人たち」をしつかりと目に留め、次代に語り継ぎつつ、この国家的危機を乗り越えたいものです。

大阪に一泊した翌朝テレビのチャンネルを回すと、衛星中継でBBC放送の報道が流れていました。「昔から日本は何度も大災害に見舞われた。その度に大変な困難に直面したが、やがてそれを克服し、以前にも増して繁栄を謳歌して来た。今回も短期的には大きな障害に苦しむが、しかし日本人はきつとまた復活を遂げるだろう」。

悪夢のような天災の当日に、早くも「ライジングサン(日はまた昇る)」を約束するような発言は私を喜ばせました。歴史上幾度も世界を驚嘆させて来た、東洋

の島国に住む日本人。古くは聖徳太子の時代から、元寇、黒船、関東大震災、空襲、原爆：大災害・国難に立ち向かって来た先人たちの苦闘の積み重ねが、英国人記者のコメントを引き出したに違いありません。

あの日あの時何をしていたかは、平成を生きた日本人の共通体験としてずつと残るでしょう。この号では、過去の津波に対処した浜口悟陵の「稲村の火」が奇しくもこの年の教科書に復活したことを伝えています。

半年後に被災地を訪れて、復興への道のりの長く険しいことを実感しました。そして関東大震災後の後藤新平の活躍を紹介しながら今回の問題点を論じました。

「大震災復興の指針」(四十号・同年十二月)

十月下旬に宮城・福島と被災地を訪問する機会がありました。建物・住居・諸施設の全てが撤去されて無機質な大地と化した町もあります。一方未だに復旧すら手の付いていない地区もあります。復興を目ざす官民の取り組みを現地で見ましたが、悲劇を克服しようという強い意志と共に一様に表明されたのは「国の大方針が決まらない」ことへの苛立ちでした。

今改めて三月十六日の天皇陛下の「お言葉」をたどりましょう。

この中で陛下は被災者の姿を「雄々し」と称え、「様々な形で少しでも多く分かち合っていくこと」と「長く心を寄せ：復興の道のりを見守り続けていくこと」を御自らにも課せられたのです。

大震災に関して多くの論評がなされましたが、この「お言葉」以上に被災者を励まし、同時に国民の心構えを的確に示した表現を知りません。今しばらく政府に期待出来ない状況が続くとすれば、一層「お言葉」の大切さを来年も訴えて行かねばなりません。

この年沖縄で開催されたシンポジウムで中西輝政氏が「この度の東日本大震災を『国難』と呼ぶ人がいるがとんでもない」と発言されたのは驚きでした。「歴史上国難とは、元寇や黒船来航などを言う。今回の地震・

津波は深刻ではあるが、これを国難などと取り乱しては、この後いつかは起こる関東・東海・関西方面の大地震に対処できない。早速国を挙げて次の事態への備えを固めるべきだ」

ご発言の通り確かにこの日本列島に住み続ける限り、将来の大災害からも逃れる訳にはいきません。さらに「国を挙げての次への備え」は被害を軽減する安全対策の次元を超えて、効率・便利・快楽・省力・進歩等々、これまで自明として来た現代文明そのものを見直す好機でもあったのですが、国民的合意の形成に向けた作業は遅々として進みません。

エネルギー・福祉・食糧生産・有事への備えなど国家の大方針を定めることも肝要ですし、更には将来に向けてどのような次世代日本人を育成するのか、「教育百年の計」も欠くことが出来ません。

「志明館」こそがその要請に応える大きな一歩と自覚しつつ、準備に邁進しています。

「日本の偉人二〇〇人」刊行(四十四号・平成二十四年八月)

昭和三十年代、私たち「団塊の世代」が子供だった頃までは、多くの家庭の本棚で偉人伝を容易に見つけることが出来ました。そこに登場した、焚き木を背負って本を読む二宮金次郎の勤勉な姿や、主君信長の草履を懐で温めた木下藤吉郎の働きぶりなどは、学校で習わなくても小学生たちの心いつの間にか植え付けられていました。

その後急速に消えてしまった偉人伝を、現代の家庭に甦らせたいという寺子屋事業に乗り出して以来の念願は、此の度『日本の偉人二〇〇人』(上下二巻 致知出版社刊)によって、ようやく叶えられそうになって来ました。

寺子屋モデルとして画期的な事業は上記の出版でした。その後『日本の偉人一〇〇人+五〇人』も加わって、偉人伝復活をリードしていることは些かの誇りです。